

# 小室井野学大学

だより

第7号

平成11年6月20日発行

## 雑学大学が目指すもの

お隣の中国は、文字文化・標語文化の国です。毛沢東・中国共産党万才、一辺倒のスローガンに変わって、この二十年間には、さまざまに毎年、その言葉は変化しました。そしてそれがその時々中国の国状の推移を、何よりも明確に我々に示してくれたのです。

今春の四川省の旅では、その横断幕や垂れ幕の中に「文明」の二文字が頻出していることに気付きました。筆者の質問に答えて、当地の若く知的な女性に「礼儀正しく、すっきりと洗練されたさわやかさ」と、その語義を解説し、いわば「先生のようなお人柄を指す」という絶妙なお世辞まで添えたのでした。

精神文化、言語文化に対する物質文明・科学文明といった日本語の用法としての「文明」とは、かなり違ったニュアンスのもとに、現代の中国では使用されていることになりました。帰国して早速わが「大漢和辞典」で検索したことはいうまでもありません。ところが

そこには、「美しい彩りがあり、光り輝くこと」「徳や教養があつて立派なこと」を第一義とし、その典拠は、二千数百年以前に成った『書経』『易経』などの古典とされていたのです。

### 雑学大学に

#### 「文明」の理想を見る

それにしても、「徳や教養」「礼儀正しさ」とは、何となつかしい言葉でありましょうか。我々日本人が、この五十年間に殆んど死語として葬りさつて来た言葉を、現代の中国では「文明」の内容として尊重しているというのです。私語雑談の洪水・ところかまわぬ大欠伸等々、現代日本の学生気質に痛憤する声は、筆者の周辺にも満ちています。その中であつて、わが雑学大学の学生諸氏の受講態度は、まさに整然・肅然として、古代の「文明」の理想をまちがいなく継承しています。去る三月の一周年祝宴の際にも、そのことは

しばしば話題となりました。わが雑学大学が、そのすばらしい「文明」の土壌の上に、更にどのような文化・文明の花を咲かせてゆくべきか、皆様とともに真摯に探究して参りたいものです。

(学長 田部井文雄)



(初めての野外授業に  
大勢の参加者が集まった)

## 第二十四回講義 四月四日 『地球環境問題とその処方箋』

教授 加藤三郎氏

二十世紀初めに十六億人であった世界の人口は、現在ではほぼ六十億人まで増え、エネルギーの使用量も急激に増えたことがデータにより明らかである。国連の「環境庁」とも言うべき国連環境計画は『地球環境アウトLOOK』の中で、「いくつかの分野における進展にもかかわらず、地球規模で見ると環境は過去十年間で悪化し続けている」と総括している。

二十世紀の人々の選択は、環境よりも『経済』であった。現内閣も経済再生内閣として位置付けられ、国民はそれを選択しているのである。

世界自然保護基金WWFの『リビング・プラネット・レポート』によると「一九七〇年以來二五年間、地球の自然の富は三〇%以上消失」した。これは日本円に換算すると年間一二〇兆円であり、年間一%を超す割合で失っているということである。

現在の環境対策では、まだまだ

悪化し続けるのは目に見えているので、もっと根本的な対策を次のように提唱したい。まず新しい原則―価値観・制度・技術の変革―が必要である。一つめは、経済の豊かさは良いという価値観を変えること。二つめに法律・経済から憲法に環境条項を入れることや、税制に環境税を導入することなど、制度の変革。三つめは環境に良いものが利用しやすいように技術を推進していくことである。

さらに、循環・共存・抑制という原則が必要である。資源は有限であるから、使い捨ての社会を辞めて『循環』させる社会作りをしめていくこと。また、様々な生物がこの地球に乗り合わせ、『共存』しているという事実の認識。そして欲に駆られて消費を増やしていくことは社会をつぶすことになるという自覚を持って『抑制』することである。

まだしばらく地球環境の悪化が予測される。これらを実行して初めて初めて環境破壊を回避できる可能性を見いだすことができるのである。

## 第二十五回講義 四月十八日 『クスリの光と影』

教授 稲樹修司氏

総論 二十世紀における科学技術の進歩は、人類の福祉に裨り知れない繁栄と幸福をもたらした。例えば絹に代わる夢の繊維ナイロンの誕生、数億人を超えるマラリア患者を救ったDDT、結核患者を大幅に減少させたストレプトマイシン、相次ぐ新しい抗生物質の開発による難治性感染症の激減、新しい免疫抑制剤の開発そして外科手術の進歩と相伴って心臓移植や、頭部を切開することなしに非侵襲的に脳血管の状態を鮮明に映し出せるMRI、CTスキャンによる診断技術の大幅な進歩等医療の分野に限ってもその進歩の足跡は驚異に値する世紀であった。しかし、三十数年前にレーチェル・カーソン女史が著書『沈黙の春』の中で警告してきた環境問題は、ダイオキシンなど現実の姿として今静かに深く地球を汚染し続け、さらに近年極めて微量であっても体内に入ると生殖障害など健康や生態系に深刻な影響が懸念される

外因性内分泌攪乱物質（環境ホルモン）について国の対応、現在の研究の最前線の状況を紹介。

各論 戦後果たしてきた代表的なクスリの紹介。まず代表的な抗生物質について…ペニシリン系、セフェム系、アミノグリコシド系、テトラサイクリン系、マクロライド系の特徴・作用メカニズム、適応症。抗ウイルス薬について…最近厚生省が許可したエイズ治療薬の開発状況、薬の特徴。催眠剤について…睡眠の型、レム睡眠とノンレム睡眠、不眠の種類と薬物両方の特徴をそれぞれ紹介。

一方はなかなか科学技術の影の部分として、四十数年にわたり国民に環境公害の悲惨さ、深刻さを投げかけ続けた有機水銀水俣病、そして睡眠剤サリドマイド薬禍、抗菌整腸薬キノホルムスモン病事件、血液凝固因子製剤など、戦後起った幾つかの医療過誤事例をとりあげその中で特に、一昨年国民に大きな憤りを抱かせた非加熱血液投与による血友病患者へのエイズ感染事件にスポットを当てず、さんな行政・厚生省、学会、企業サイドの各責任について検証。

## 『野川とはけの森』

教授 阿部 正敏氏

小金井は最近都市開発が進み、農地が急速に減るとともに雑木林や屋敷林が姿を消していった。しかし小金井公園、武蔵野公園、野川公園等緑地が市内にあるので緑を求めて小金井を訪れる観光客が多い。その中でも野川を歩く人たちが多いので雑学大学で野川を見直して見ようと思った。野川は以前はたんぼの中を蛇行していた中四〇五メートルの川であったが、改修を行って川幅を広げ、現在のような川になった。言い換えれば野川は新しく作られた人工の川で昔の面影は全くない、野川の植物を見ているとアゼナルコスゲ、アラゲハンゴンソウ、マメアサガオ、ガガイモ、ホタルブクロ、キツネノマゴ、キカラスウリなどが現れては一年で消えてしまう。毎年春と秋に行う下草刈りの影響なのだろうか。数年前までは野川の土手でヨモギ摘みの人たちがよく見かけたが、最近はずミムギ、カモガヤ、イチゴツナギ、

オオブタクサ等が土手を覆いヨモギは激減してしまった。小金井新橋付近でヨモギに卵をうみつつけグズを食草とするカンタンが秋になるとル、ル、ルと静かな声で啼いているがヨモギの激減でカンタンも風前の灯火である。野川のように新しく造成したところは在来日本の野草は帰化植物に押されがちとなる。下草刈りを繰り返しているところでも帰化植物がますます元気に、在来の野草はますます影が薄くなって行くように思える。

野川の調整池からはけの森がよく見渡せる。一見、緑豊かな森に見えるが放置されていてアオキ、ヒサカキ、カシ等の常緑樹が増え、モウソウチクやアズマネザサがはびこり林床は暗く山野草も少なくなり以前の明るい雑木林の面影がなくなってしまった。

はけの森の活性化を計り野川、調節池を含めた里山環境を作り生物の多様性を計ることにより、子供達に自然の営みの素晴らしさを知ってもらい、また社会生活の中での疲れを癒しエネルギーの再生産を計ることも出来よう。小金井市民として水と緑の循環をどうすれば良いか考えてゆきたい。

## 『積極的な生き方』

教授 片平進一氏

私達は八十年か、九十年過ぎるとこの地球上から去っていく。この世に生まれて死んでいくというのは私達にとつての共通の事実である。しかるにこの事実をどう受け止め、どう対処するかによつてその人の人生は右にも左にも分かれていく。私は何をとりかというプラス指向の明るい積極的な生き方を選ぶ。この生き方の中に行きがい、生れがいがある。

折角、人として生まれ、人として生きるからには、誰しも生きがい、生れがいのある人生を送りたいと考えている。一体生きがいの「かい」という言葉はどんな意味を持つのか。「かい」とは、効果、価値、しるし、張り合い、喜びを意味する。人間が、事物や行動に対して、効果や価値を認めた、しるしや、張り合いや喜びを感じとった時、それは「かいある」とこととなる。これが「生きがい」という意味である。

「生きがい」とは人として生れ

た価値があり生きていく張り合いがあることを言う。したがって話だけ聞いて「そうかわかった」ではだめである。それはオニギリの話は何時間聞いても腹が一杯にならないのと同じである。「生きがい」は自分の人生設計の上で自らが作っていくべきものである。その時に大事なものがプラス指向で生きることである。プラス思考の考え方に立つと、「はつらつ」「愉快」「さつそう」「朗らか」でいられる。明るく過せば、自律神経をも刺激してホルモンの分泌も良くなり、身体的にも大いなる効果がある。

このプラス思考の最も大切な実践の一つが「笑い」である。耐えず微笑む、またよく笑うという習慣を身につけることである。そしていつでもユーモア、時にはダジャレを用いて周りを楽しませる取り組みが、脳の活性化につながる。一回怒ると一十年を重ねることになる。逆に「一笑一若」「一回笑うと細胞が五千も増える。「笑い」は素晴らしい効果がある。

# 今後のカリキュラム

7月 4日 「地方自治に携わって50年」 大久保慎七氏（前小金井市長）

②場所変更－福祉会館3Fの公民館学習室AB

7月18日 「快適な住まいづくり」 亘理鐵哉氏（一級建築士）

8月 1日 「（仮）世界7大陸最高峰登頂成功」 野口健氏（亜細亜大学学生）

8月15日 「消防今昔物語－安全をどう構築するか」 晦日正氏（小金井消防署長）

9月 5日 「老婚のすすめ－孤独なくして生きがいを」 小俣英五氏（東京都行政書士）

9月19日 「ヨーロッパの老人ホーム－デンマーク・ドイツ・オーストリア・フランス」

小杉山禮子氏（生活評論家）

・教室は小金井工業高校会議室。

・時間は午後2時～4時です。

・スリッパをご持参下さい。

・学生登録は、年会費2000円。

野外講義の日

・緑蔭に 談笑の間 教師来る

・百近き 人集まりし 茂り中

・たえだえの 野川の涸れや 犬ふぐり

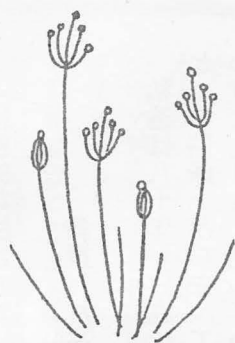
・聖五月 同道友の なごみあし

・観察会 はけも水辺も 風薫る

・脛まくり 嬉々と浸れり 踊り花

・著我の花 せゝらぎ名残る 遊歩道

梶野葉水



編集後記

五月二日。雑学大学で初めての野外講義が行なわれた。当日は晴天で七十名以上が出席。阿部教授のお話を聴きながら、野川周辺を散策した。すつぽりと緑に包まれた中を、ゆつくりと歩くこと約二時間。本当に気持ちのよい日曜日の午後であった。「雑学大学」に関する先生のお話。

「雑学大学」とは明治の文壇人が造った言葉。実際に林を守っていた人達は雑学と言われてどう思ったか。しかしそれに代わるいい言葉が無かったからというところでしょう。コナラやクヌギといった落葉樹から成る雑学大学は本当に手入れが大変です。自然にまかせておくとか緑樹林に戻ってしまうからです。お話の途中で、雑学大学から雑学大学を連想。きっと雑学大学も心のこもった手入れが必要なのであろう。

（天野記）

発行責任者 五十嵐京子  
小金井市本町

TEL & FAX

（夜間）